研究論文

萩城東園庭園における眺望景観

本 中 真*

Reconstructed Views from Tou-en Garden in Hagi-jou Castle.

Makoto MOTONAKA*

摘要：山口県萩市の萩城跡内に遺存する東園庭園は18世紀に作庭された庭園であるが、「聚遠」と名付けられた館の東軒先からは東南方向に城郭外の山脈を望見することが可能であったという。

また、後に増築された御殿も眺望を意図した中2階造りの構造を持っていた。この小論では、とりわけ後者に注目し、C.G.を用いて御殿からの眺望景観の復原を行うとともに、そこにおける眺望行為の形式と眺望景観の性格について明らかにした。

1. 序 研究の目的と方法

萩城は、慶長9(1604)年毛利輝元によって築城が開始されて以来、幕末までの約260余年にもわたる長期間、防長両国(周防、長門)の拠点として政治、経済、文化の中心的役割を果たした城である。玄海灘に浮かぶ独立峰、指月山の頂上に詰丸を頂き、その南麓から松本川、橋本川が形成する三角州にかけて本丸、二の丸、三の丸と城郭の中心部を順次配していく(図-1)、いわゆる連郭式という城郭形式に属する(図-2)。また本丸東北方の区画には、藩政の鎮護、城郭および城下町の守護、あるいは藩主の江戸参勤の無事を祈念することなどを主たる建立目的とし、そのための加持祈祷を行う満願寺、三摩地院、宮崎八幡宮、天神社等の社寺を配置する¹⁾。

この本丸東北方の区画の南半部、すなわち満願寺と本丸に挟まれた区画には、18世紀中葉、第6代藩主宗広の頃に御茶屋を中心として「東園」という庭園が造られた。このころの「東園」の状況を伝えるのが山県周南の著した『東園記』²⁾で、東園内の景物を選定して定められた六景二十勝のうち、「聚遠」と名付けられた高い館の東軒先からは、庭園のみならず東南方向に海を越えて対岸の山なみをはるかに望見することができたという。また、その後第11代藩主斉元の時に御茶屋の南側に御殿が増築されたが、この時の差図からは御殿が2階造りで、園内だけではなく郭外の眺望にも適した構造を持っていたことを知る。したがって「聚遠」をはじめとして、東園の館は園外景観の眺望を常に意識しながら造改作されたことがわかる。

しかしながら、現状地形を踏査してみると、東園園地の平面形は極めて良好に遺存しているのに対し(写真-

1)、御茶屋や館、あるいは御殿の平面的な位置はまったく推知することができない状況にある。同時に、樹木の繁茂が眺望を阻害しているだけでなく、建物が失われているが故に視点の高度を確保することができないため、城郭外の山脈を広々と望み見る事が不可能となっている。

図-1 萩城跡周辺地形図

(原図；国土地理院 1/50,000 地形図)

*奈良国立文化財研究所

この小論は、こうした状況を踏まえて、とりわけ第11代藩主斉元の時代に増築された御殿に注目し、東園庭園の景観、御殿の位置および高さ等を推定復原することによって御殿からの眺望景観の復原を試み、そこに見られる眺望行為の形式と眺望景観の性格について明らかにしようとするものである。庭園景観、御殿の位置および高さの推定復原については、残された絵図や文献を手がかりに行い、これをもとに作成したデータをコンピュータに入力し、眺望景観をコンピュータ・グラフィクス（以

写真-1 東園庭園の現況

図-2 萩城復原図および東園の位置

下 C.G. と略す) によって復原した。

2. 萩城の復原

東園の復原に言及する前に、萩城全体の遺構について触れておこう。萩城は、廃城に伴って明治時代に全ての建物が取り壊されて売却処分されたため、現状では堀や石垣等の城郭の骨格を示す遺構しか遺存しない。しかし、幸い萩城に関しては各時代の区画や建物配置を知り得る絵図が数多く残されており、これらを現状の遺存状況と照合させるならば、ある程度の推定復原は可能である。

萩城全体の地割や建物配置を示した絵図は、山口県文書館や萩市郷土博物館などに計20数葉が残されている。このうち、本丸、二の丸、東園、満願寺等、城郭の中心部分の建物配置を示すものは計5葉である。しかし、いずれも建物の外観を鳥瞰図的に描いたものや、建物の規模を模式的に描いたものが大半で、建物内部の詳細な部屋割について示したものは極めて少ない。後者の例として、本丸御殿や東園御茶屋等の局所の詳細な平面図が残されている。以下に復原図作成において参考とした絵図について解説する。

① 慶安5(1652)年絵図(山口県文書館蔵)

- 各地に残る正保期の絵図と同じ性格の絵図で、幕府の命に応じて作成され、慶安5(1652)年に提出されたものである。
- 城郭中心部の建物配置や外構施設の寸法が克明に記載され、この絵図が藩の軍事機密情報を幕府に提出することを目的に描かれたものであることを示す。
- 記載された寸法によって、矢倉、石垣、堀、区画堀等の平面的な規模は判明するが、建物内部の詳細な平面までは記されていない。
- 本丸御殿の大まかな配置と、屋根の材質を判別することができる。また、東園が未だ造営されていない時期の絵図であるため、本丸以北には区画や建物が描かれていない。

② 寛保2(1742)～延享4(1747)年絵図(萩市郷土博物館蔵)(写真-3, 4)

- 東園が造営された直後の状態を伝える極彩色の絵図である。
- 外構施設の平面的な寸法は示されていない。
- 東園御茶屋と付属建物が描かれている。園池にかかる2つの橋は、同一の素材で構築されていたものと思われ、描法から木材を用いた橋であったことが想像される。
- 満願寺、宮崎八幡宮、三摩地院の伽藍も鳥瞰図的に描かれている。ただ、宮崎八幡宮の社家は、範囲のみ朱で塗りつぶされている。
- 建物の屋根の材質は、概ね判別可能である。

写真-3 寛保～延享年間絵図（萩市郷土博物館蔵）

写真-4 寛保～延享年間絵図（萩市郷土博物館蔵）
……本丸以北

③ 萩城細図（山口県文書館蔵）（写真-5）

- ・明治初年の写図で、おそらく廃城直前の様子を伝えるものであろう。建物や区画の塀が緑色と黄色で模式的に描かれるが、寸法の記載はない。
- ・東園は園池外周を巡る園路が記され、シバなどの地被植物や、シバドテなどの地形の起伏に関する記載も認められる。また東園御茶屋および館は、やや北に偏って描かれている。

④ 萩御城内並西御長屋共差図（山口県文書館蔵）

- ・嘉永7(1854)年作成で、本丸の御殿および西長屋（大奥）の具体的な部屋割や、区画が指し示されている。

⑤ 孝姫様基之允様東園御部屋差図（山口県文書館蔵）

（図-3、4）

- ・第11代藩主毛利斉元の次女孝姫と三男の基之允が、天保3（1832）年に御殿が落成してから天保8（1837）年に新川御殿に移って解除になるまでの、東園の御殿と御茶屋、および付属建物の詳しい平面図である。

- ・御殿の南端に「大濠」と記す帯状の部分があり、

写真-2 東園南端の堀（東から）

写真-5 萩城細図（山口県文書館蔵）

これを現在東園南端を斜行する堀に比定すること
ができる。それ故、御茶屋、御殿を中心とする建
物群は、この堀に接して北側に存在したものと推
定できる。

以上の5枚の絵図をもとに作成した復原平面図が、図-2である。前述のごとく各絵図の製作年代に開きがあるため、作成した復原平面図は江戸時代のうちでもある特定の時期の建物配置および区画割を示すものではない。例えば、区画割や外構施設については江戸時代初期製作の慶安古図①を参考として作図したが、東園、満願寺、宮崎八幡宮は江戸時代中期と末期の製作の②、③、⑤の絵図、本丸御殿は江戸時代末期製作の④の絵図を参考として作図した。また、これ以外の地域は概ね①の絵図を参考として推定復原した。それゆえ、図-2の区画割や建物配置は、参考としたそれぞれの絵図の製作年代の配置を示していることになる。もっとも、区画割については江戸時代初期製作の絵図と江戸時代末期製作の絵図との間にそれほど大差はないから、図-2に示した推定復原案が江戸時代全般を通じて不変のものであったと思われる。

3. 東園の歴史と復原

本丸以北の地は、満願寺をはじめ毛利家の菩提寺ではないいくつかの寺社を擁する地域として特殊な性格を持つと同時に、もともと初代藩主毛利輝元が自らの隠居所に利用しようとしたという経緯もあって、築城当初からかなり重要視されていた。そういう意味では、本丸の南に存在する二の丸と同格の、いわば「北の二の丸」とでも言うべき地域であった。

東園はこの地域の南半部に位置する。南を本丸御殿、北を満願寺、西を指築山麓、東を海岸線沿いの銃眼土塀にそれぞれ囲まれた、東西約140m、南北約90m、面積約10,600㎡の敷地を占める。現状に残る園池は第6代藩主宗広の頃に作庭されたものと推定されるが、それ以前にもこの地域には天神社と御茶屋が存在したらしい。その頃の具体的な建物配置を示す絵図は残らないが、『毛利十一代史』の「防長寺社由来」³⁾によれば、天神社は慶長9(1604)年に毛利輝元の萩入部に伴って建立され、元禄11(1698)年に現在の地に移されたことがわかるし、また元禄12(1699)年からは藩主の江戸参勤の無事を祈願する連歌会が催されるなど、祈祷の場所であると同時に宴遊にも適した環境を整えていたことが想像される。後述するように、現況の園池が開削される以前にも、園池が存在したことを示唆する文献も認められるが、その形態を具体的に示す絵図は管見のおよぶ範囲では認められない。

現状に残る東園の園池が造成された直後の姿は、唯一寛保～延享年間(1741～1747)の絵図に見ることができ

る(写真-4)。しかし、この絵図も全体の概観を鳥瞰図的に描いており、建物の具体的な部屋割までは示していない。この頃の東園の状況を詳しく語るものが、山県周南の著した『東園記』²⁾である。山県周南は周南の海北村に貞享4(1687)年に生まれた儒学者で、江戸において荻生徂徠の門下で大成した後、萩の藩校である明倫館で教鞭をとり、宝暦2(1752)年に没した⁴⁾。『東園記』は、彼の著作集『周南文集』に納められているもので、東園庭園の景物から六景二十勝を選定してそれぞれの景観に意味付けを行っている。この第一に挙げられているのが「聚遠」である。「聚遠」すなわち「館の東の軒」からは庭園のみならず城外の山脈まではるかに眺望できたという。

「先候時 或為候議園圀 …… 東園於是乎成矣 蓋其地舊有池 浚而深之 大可浮舟 池中築島 環以葱翠 崇者為山 卑者為野 曩者為林 総焉以高館臨之 今候立仍舊不改 以為遊息之所 迺就其所有 各立名號 以飾佳觀 且便伝呼 其館東軒曰聚遠 近則一覽園中 遠望則東南郭外諸山 歷歷列眉睫之間 ……」

文中の「先候」とは六代藩主宗広のことを指し、「今候」とは七代藩主重就のことを指す。六代藩主の時に東園は造られ、七代藩主の時に庭園の改作は行わずに旧にならって遊息の地としたという。そして東園の発端は、もともとこの地に存在した池を拡張すると同時に浚渫して深くし、中島を新たに造成するほか、築山や林を造り、また高い館を建てたことにあるのだともいう。この文章をそのまま信用するとすれば、東園はもともと存在した池を拡張し、現状に遺存する園池の形態に整えられた頃から、眺望に適した高い建物を備えていたことになる。そして、この建物こそが館の東の軒である「聚遠」ということになろう。しかし先に述べた寛保～延享年間(1741～1747)の絵図(写真-4)からは、「聚遠」に比定すべき眺望に適した高い建物を判別するのは不可能である。

東園に関する記事で注目されるものがいまひとつある。それは第11代藩主斉元の頃の『孝姫様基之允様東園御部屋差図(山口県文書館所蔵)』(以下、単に差図と呼ぶ)である。それ以前に存在した御茶屋をはじめとして、この時点で新たに増築された御殿の詳しい平面が示されている(図-3, 4)。差図の表題に見える孝姫は、文政12(1829)年8月9日に生まれた第11代藩主斉元の次女である。斉元と斉元の侍女であった綾園との間に生まれたのだが、天保4(1833)年8月15日に斉元の正妻であった由美子夫人の所生とし、嘉永3(1850)年宇和島藩主伊達宗徳に嫁した後、同6(1853)年に没した。また基之允は天保1(1830)年10月20日に誕生した斉元の三男で、母は孝姫と同じく綾園である。後に教徳(のりゆき)と改名するが、天保14(1843)年8月20日に新川御殿で

図-3 孝姫様基之允様東園御部屋差図（萩市教育委員会所蔵の写真より書き起こしたもの）

図-4 差図中の別紙に示す御殿1階部分の平面（図-3中の番号と対応）

早世する¹⁾。前述の差図の表題には、「天保三年出来、同八年新川御殿 移御後解除」と断わり書きがあるため、天保3（1832）年に2人のために御部屋が増築されたが、天保8（1837）年に2人が揃って新川御殿に移った後に、東園の御部屋は解除されたことが判明する。しかし、明治初年の写図とされる『萩城細図』（写真-5）には、庭園の西側にひとかたまりの建物群が描かれており、天保8（1837）年に解除された建物は孝姫と基之允の御部屋を含む御殿のみで、御茶屋やその他の御殿、台所など

図-5 本丸以北の地域の復原図

写真-6 東園南端に遺存する切石遺構

の家政機関の建物等はそのまま幕末まで存続したものと考えられる。この孝姫・基之允の御殿は、後述するように2人の「御座ノ間」を中心とする建物だが、その東端

が2階造りになっていて、庭園および郭外風景の眺望を意図した設計になっている。ここで問題となるのは、この2階造りの部分と『東園記』に記す「聚遠」との関係である。まず第一に考えられるのは、「聚遠」は御殿の前身建物で、御殿の増築にともなって壊却された可能性である。つまり両者はまったく別物とする考え方である。第二は、この2階造りの部分が「聚遠」そのものであり、これに天保3(1832)年になって一部手が増えられて孝姫・基之允の御座ノ間が整備されたとする捉え方である。いずれにしても憶測の域を出ないのであるが、ここでは差図の「天保三年出来」という断わり書きを重視して、孝姫・基之允の御座ノ間を中心とする御殿は天保3(1832)年に新築されたものと理解し、前述の2つの可能性のうち前者を支持しておきたい。

以上のように東園の館には、庭園だけでなく郭外の眺望に適した建物が常に存在したことがわかる。このうち、「聚遠」については詳細な絵図が残らないため位置等の復原は不可能であるが、天保3(1832)年の御殿は詳しい平面図が遺存しており、比較的復原が容易である。以下に絵図や文献をもとに、天保の御殿を中心として東園の建物と庭園の復原を試みることにする。

(1) 建物の復原

『孝姫様基之允様東園御部屋差図』には、東園の御殿南端に東西方向に「大湫」と記す帯状の区域を示す(図-3)。差図に描かれた畳の大きさから、この「大湫」の幅員を約2mに推測することができる。「大湫」とは、大きな流れという意味であり、おそらく御殿南端には堀が存在したのであろう。これを現状地形に求めると、指月山西麓から井上矢倉北側を東園地区南端沿いに東へ流れる幅約2~2.5mの石組の堀が存在し、これを差図中に記す「大湫」に比定することが可能である(写真-2)。また、東園区画の東南隅から東園地区南端沿いに西へ約80~85mの地点には、何等かの建物の基底を為すと考えられるL字形に折れ曲がる切石が地表面に露出している(写真-6)。差図には御殿の東南、築地堀沿いに蔵が存在したことを知る。この切石の曲がりには、あるいはこの蔵の基礎部分にあたるのかも知れない。以上のように考えれば、東園の御茶屋を含めた御殿は東園の敷地の南端に接し、上記の折れ曲がった切石より西方に存在したことが推定される。また、1間を6.5尺とすると、畳1枚の長辺は約1.97mとなり、これを基準に御殿全体の平面的規模を決定することが可能である。推定復原平面図は、図-5、6のとおりである。

さて次に具体的な平面構造の検討に入ろう。差図に描かれた建物配置からは、東園の御殿はいくつかの部分に機能分化していたものと考えられる。先ず第一に北側の御茶屋を中心とする宴遊の場所、第二に玄関北側の台所と家政機関の部分、第三に玄関南に存在し坪庭を持つ特

異なる建物、第四に「御座ノ間」の控えの間、そして第五は最奥部の「御座ノ間」である。このうち、差図の表面に別紙が張り付けられて、おそらく1階と2階の平面を分けて図示したと思われる箇所が2箇所ある(図-4)。それは玄関の南側に位置し、大きく3つの部屋に区分されて坪庭を形成している建物と、御座ノ間東端の11畳の間である。前者はおそらく侍女等の住まう建物であろうと考えられ、各部屋毎に「押入」と「坪之内」を挟んで物置が備えられている。これに対して後者は、「御座ノ間」と記す8畳2間のさらに東に存在し、1階が納戸、2階が11畳の座敷になっている。この11畳の間の東端は「セウシハ」(障子8)と記されているとおり、かなり開放的な建具構造となっている。それ故この11畳の間は、庭園景観や遠くの山並を遠望するために準備された座敷であることがわかる。この11畳の間への上り口は、座敷の東南隅に一つだけ存在する。1階の「御座ノ間」は8畳の間と6畳の間が南北に一对並列し、北端と南端が板敷の廊下になっていて、この南側の廊下の東端内側が2階への上り口になっているのである。また、廊下東端の外側には、北と南に便所も設けられている。すなわち「御座ノ間」の建物は、南北にほぼ対称の平面形を持っていることになる。おそらく孝姫と基之允は、南と北に分かれて8畳の間および6畳の間の2間を割り当てられ、2階部分の11畳の間は2人が互いに共有しあう空間であったものと思われる。

次に11畳の間の断面について復原してみよう。御座ノ

間の建物は、御殿の中でも最も格式の高い建物であるから、おそらく入母屋造りであっただろう。しかも、11畳の間だけがこの建物の中で2階部分を構成するのであるから、おそらく高さの比較的高い一つ屋根の中に、1階

図-7 東園御殿復原断面模式図

図-6 東園御殿および庭園復原図(天保年間)

部分の納戸と2階部分の11畳の間とが納められていたの
であろう。納戸はさして天井高を必要としないし、11畳
の間が半ば中2階のように納まれば11畳の間の天井高も
ある程度確保できることとなる。この11畳の間が中2階
として併設されることにより、御座ノ間（8畳の間、6
畳の間）の天井高は、一般的な座敷よりも比較的高いも
のとならざるを得ない。図-7が推定断面模式図である。
御座ノ間の床高を地表面から0.75m（2.5尺）程度とし、
納戸の天井高を1.8m（6尺）程度に推定してみた。こ
のように考えれば、11畳の間の床高は、地表面から2.55
m（8.5尺）となる。

(2) 庭園の復原

山県周南の『東園記』に記す六景二十勝は、以下のと
おりである。『東園記』出来以後の史実に大がかりな庭
園の改作を示す記事を認めないから、おそらくこの時期
の庭園景観は、幕末まで存続したのではないかと考えら
れる。

1. 六 景

- A. 聚 遠……………館の東軒。
- B. 停 雲……………池。
- C. 小蓬萊……………中島。珍しい岩や石、美しい草や
枝
- D. 龍 蟠……………橋。中島の南。龍の姿のようにう
ねうねしている。
- E. 老人峰……………池の北。老人星（南極星）に対向
するの意味。
- F. 臨湖亭……………老人峰の東。東屋は鳥の翼の如し。
水上閣。

2. 二十勝

- a. 鶴子皋……………館の南。2羽鶴が囲いの中に住む。
- b. 雀余糧……………畝にも満たない水田。雀の餌程度
のもの。田園地帯の趣。
- c. 易逢春……………桜。四季開花。駿州の分枝。
- d. 羽衣原……………松原。易逢春の隣。三保の洲にな
ぞらえる。
- e. 鳳凰洲……………羽衣原から龍蟠橋までに存在する。
水中に突出。洲のように見える。
青石が敷き詰めてあり、ソテツ植
栽あり。
- f. 騰蛟子……………鳳凰洲の岸。大蛇が舞っているよ
うな24尺の松が植栽。
- g. 石芙蓉……………鳳凰洲にある富士山の山容に類似
した石。
- h. 紫錦棚……………紫藤。羽衣原の南の小池の上に架
してある。
- i. 雲根橋……………紫錦棚の池を中断する橋。
- j. 青翰渚……………池南際の中にある船着場。
- k. 下天竺……………池の北の樹林。満願寺に至る。

l. 成 趣……………樹林後方の野菜園。

○m. 烈風谷……………樹林奥の暗部。2頭の木製の虎あ
り。

○n. 星子浜……………老人峰の跡が池水際にあり。白い
小石が敷かれている。

o. 緑菌原……………星子浜の西。冠子巖に至る箇所に
青草を織ったような部分がある。

p. 冠子巖……………緑菌原の西方。館に近い水辺に存
在する巨石を組んだ山。

q. 飛来松……………冠子巖の岩間に生えている松。

○r. 向陽磯……………館の正面。小蓬萊に対向する位置。

●s. 荷葉石……………磯から8尺の位置にある平らな大
石。

t. 生風泉……………階の傍らに存在。湧水があり、手
洗いあり。

以上のように、東園の庭園部分に比較して、かなり豊
富な景観が高密度で凝集されていたことがうかがえる。
これらの六景二十勝のうちではば間違いない位置の復原
ができるものが●印を付した計7箇所で、比較的推定復
原の容易なものが○印を付けた計9箇所である。

六景のうち、A. 聚遠は『東園記』に記すように高さ
の高い建物であったことがうかがえ、眺望の利く座敷を
指すのであろう。しかし聚遠が、前節で触れた天保3
（1832）年の御殿東端2階造りの11畳の間と同一である
か否かは断定できない。むしろその可能性は低いであろ
う。また、現状の園池が各絵図に記す園池の形態と酷似
していることを考えれば、『東園記』に記す池と現在の
池との間に形状のうえで大差があるとは考えられない。
したがって、B. 停雲、C. 小蓬萊が、現在の池水面と
中島を指すことは明白である。同時に、D. 龍蟠が寛保
～延享年間の絵図に記す中島の南に位置する橋を指すこ
とも明らかである。これに対して、E. 老人峰は位置特
定の明確な決め手を欠くが、池の北に存在し小山を形成
していることがうかがわれるから、現状の池北岸から東
園と満願寺とを限る築地塀までのやや小高い樹林帯に比
定することが可能である。F. 臨湖亭は、老人峰の東に
隣接しているから、これもある程度の位置を推定するこ
とが可能である。

二十勝では、まずk. 下天竺の位置を、東園区画の東
北方隅付近に求めることができる。これは、おそらくE.
老人峰の後方にあたるのであろう。i. 雲根橋は、現在
の池西南隅にかかる橋と同一位置に存在した橋で、この
橋の西方の小池にh. 紫錦棚を想定することが可能であ
る。また、s. 荷葉石は、現在も南の橋の北袂に遺存す
る上面の平らな巨大な石を指すのであろう。これに対し
てその他の16勝地は、上記のいくつかの勝地の位置を勘
案して大まかな位置の推定はできるが、確実な証拠はな
い。例えば、m. 烈風谷やn. 星子浜は、E. 老人峰の

位置から割り出すことができるし、o. 緑菌原やp.冠子巖は、n. 星子浜の位置から導き出すことができる。j. 青翰渚はi. 雲根橋東方の池南岸辺りに存在したのであろう。r. 向陽磯は、館と中島との中間の池西汀線付近に比定できる。また、q. 飛来松、r. 向陽磯等も同様にして位置を求めることができる。このように、確実な決め手は欠いているのであるが、二十勝の各位置をほぼ推定することができる。これを図示したものが図-6である。見られるように、館の南のa. 鶴子皋を先頭に、館西から池の西北隅、西岸、南岸、東岸を経て北岸へと至り、再び西岸へと回帰する反時計回りの記述コースが設定されていることがわかる。

なお、園池にかかる橋について若干触れておきたい。寛保～延享年間（1741～1747）の絵図には、龍蟠と雲根橋とは同一の描法で描かれており、おそらく木材を用いた橋であったと思われる（写真-4）。ところが、天明6（1786）年2月付けの『御城内御作事諸御悩所坪数其外目録』⁵⁾によれば、「東園橋式ヶ所内 壱ヶ所石橋 壱ヶ所板橋」と記し、石橋と板橋が一つずつ存在したことがうかがわれる。この文書は、天明6（1786）年に藩作事方が萩城内の直轄施設についてとりまとめたものであり、上記の橋以外にもかなり詳細にわたって城内の施設が列挙されていて信頼のできる文書である。龍蟠と雲根橋のどちらが石橋と板橋であったのかは不明だが、雲根橋は現在も石橋が遺存しているため、龍蟠が板橋、雲

根橋が石橋と考えるのが妥当であろう。寛保～延享（1741～1747）年間の絵図に記す橋は、両者ともに板橋であることが想定されるから、それ以後天明6（1786）年までの間に橋のかけ替え工事が行われたものと考えら

図-8 眺望の対象となる周辺の地形

表-1 視点、遮蔽物、眺望対象物相互の視線の仰角

No	山 頂 名	標高 (Z)	距離 (L)	方向角	θ
①	笠 山	112.2 m	3,550 m	24°	+ 1° 40' 18"
②	鴻 ヶ 岳	395.0 m	5,500 m	62°	+ 4° 01' 07"
③	権 現 山	464.0 m	6,200 m	80°	+ 4° 12' 03"
④	唐 人 山	474.0 m	5,450 m	92°	+ 4° 52' 51"
⑤	田 床 山	437.0 m	5,275 m	108°	+ 4° 38' 35"
⑥	基盤ヶ岳	551.0 m	6,950 m	100°	+ 4° 27' 45"
⑦	焼 下 山	393.4 m	5,875 m	145°	+ 3° 44' 51"
⑧	茶 白 山	310.0 m	4,475 m	165°	+ 3° 51' 11"

$$\theta = \tan^{-1} \{ (Z - 8.6) / L \}$$

図-9 視点、遮蔽物、眺望対象物の位置関係模式図

れる。

また、『萩城細図』（写真－5）には、園池の周囲に「シバ」などの地被植物に関する記載があるほか、「シバドテ」などの地形の高低差を示す記載も認められる。こ

の記載箇所と同色の緑の彩色が施された部分が他にも多数散在するため、東園庭園の地表面の多くは芝で覆われていたものと想像される。また、緑の彩色がされていない部分が園池の外周に帯状に連続し、園路を示したもの

図－10 11畳の間から望む東園の眺望景観復原図（コンピュータグラフィックスによる）

図－11 11畳の間から望む周辺地形の眺望景観復原図（コンピュータグラフィックスによる）

図－12 11畳の間から望む眺望景観復原図（図－10, 11の合成。コンピュータグラフィックスによる）

と理解できる。つまり、東園園池は、園池の周囲を園路沿いに六景二十勝を鑑賞できるよう設計された回遊式庭園であった。

4. 眺望景観の復原

東園御殿の御座ノ間2階からの眺望景観の復原に際して必要なデータは、前節までの成果に加えて、視点、遮蔽物、眺望対象物のそれぞれの標高である。

まず視点高は、3-(1)でも触れたように御座ノ間2階の11畳の間の床高を地表面から約8~9尺(2.4~2.7m)に復原することが可能である。発掘調査が行われていないため、当時の地表面の標高は不明であるが、御殿東南に位置する蔵の基礎部分と思われる切石が現地表面に露出しているため(写真-6)、当時の地表面は現地表面とほぼ同じ高さであるか、若干の覆土はあるとしてもさほど低くない位置に存在するものと思われる。したがって、正確な当時の地表面高を把握できない現時点では、現地表面の海拔高(+3.0m)を当時の地表面と同高と仮定しておくより方法はない。この推定海拔高に、11畳の間の床の推定復原高を8.5尺(2.55m)と見積り、床に人間が座ったときの座高を0.8mとすれば、これらの総和、すなわち $+3.0m+2.55m+0.8m=+6.35m$ が、視点の海拔高となる。

次に遮蔽物の高さを復原しよう。最大の遮蔽物は、城郭最東端の銃眼土塀である。

館から銃眼土塀の石垣裾まではほぼ平坦であるが、石垣の比高は約4.0ないし4.5mあって、天端の標高は概ね+6.5mである。この上にある銃丸土塀の高さを7尺(約2.1m)と見積って、土塀の天端の標高は+8.6mとなる。

眺望対象物となるのは、海を隔てて対岸の山脈である。これは当時とほとんど変化がないから、現状の地形図から標高を読み取ってデータを作成した(図-8)。

以上の視点、遮蔽物、眺望対象物の相互の位置関係を模式的に図示したのが図-9である。見られるように、視点と遮蔽物との水平距離は約113mある。したがって、視線の仰角、すなわち視点と遮蔽物である銃眼土塀頂部とを結ぶ直線が水平面となす角度は $+1^{\circ}08'27''$ となる。また、山脈の各ピークと銃眼土塀頂部とを結ぶ直線が水平面となす角度(θ)をまとめると、表-1のようになる。これらの角度(θ)が、先に触れた視点からの視線の仰角($+1^{\circ}08'27''$)より大きい場合はそのピークは視界にはいることになり、小さい場合は見えないことになる。この表からは、いずれのピークも眺望可能であることがわかる。

次に、これらのデータをパーソナル・コンピュータに入力し、コンピュータ・グラフィックスによって眺望景観の復原を試みた。ソフトウェアは、市販の透視図作成支援システムを用い、建物、塀、水面、樹木、地形等の各

部材毎にデータを入力した。御座ノ間2階からの推定復原眺望景観は図-10~12のとおりである。図-10は、庭園と遮蔽物が存在しない場合の自然景観のみの復原図、図-11は庭園等の施設のみの景観復原図、そして図-12は両者の合成図である。

5. 眺望景観の性格

前節までに明らかにした、御座ノ間2階の11畳の間からの眺望景観は、眺望するという人間の行為との関係において、次のような4つの特徴を持っている。

まず第一に、眺望対象物がかなり広い範囲にわたる景観であることが指摘できる。視界の広がりや水平、垂直のいずれの方向についても大きく、極めて開放的な印象を与えるものとなっている。

第二に、11畳の間から東方に展開する眺望景観は、近距離にある庭園景観と、遠距離にある城郭外の山脈とを対置することによって、互いのシルエットと両者間の距離関係をきわだたせ、両者の相違をいっそう明確にしている。この相違関係を踏まえて、両者をあえて視覚的に連結する媒体の役割を果たすのが、水平方向にのびる銃眼土塀である。連結されるのは2つの景観ではあるが、一方は城下町の周囲をとりまき、永久に存在し続ける生の自然空間の景観であり、一方は六景二十勝に代表されるように、多くの景をミニチュア化したいわば自然を人工的に加工して創り出された庭園空間の景観である。この両空間の対比関係を、互いの遠近という距離関係を踏まえつつ、同時に視覚の上で景観として認識することを可能ならしめたのが、他ならぬ11畳の間であった。

第三に、上記の眺望景観に関する2つの特徴は、東園全体の中に占める11畳の間の位置によって、さらに強調されることとなる。11畳の間の位置の特徴は、東園全体および御殿内における人間の動線と、その動線上における視界の広がりとを検討する中で明らかとなろう。まず東園への正式な導入部は御殿西側の玄関である。玄関へは南の本丸から北上して「大滝」と称する堀をわたり、御殿の西を通過して到達する。この時点では、人間の視界はあくまで進行方向である北へ向かっているものであり、東側の風景は、井上矢倉や東園御殿に遮られて見ることはできない。引き続き、玄関から拾二畳および廊下を経て奥の御座ノ間に至る途上においても視界は閉ざされている。しかもここで注目すべきは、御座ノ間においても東園の庭園景観すら視界に入らないということである。8畳と6畳の御座ノ間は東西方向に並列し、南北方向に対称形に配置されているが、それぞれの座敷が面する南庭と北庭は板塀で囲まれ、東園の園池とは隔絶されているのである(図-3)。御座ノ間から南側の廊下を東に突き当たり、階段を登りきったところで人間の動線は最終地点である11畳の間に到達するが、ここにおいてはじ

めて視界は東園の庭園とはるか海を越えて対岸の山脈へと開かれていくのである。したがって、御殿の中でも11畳の間だけが視界の解放された空間であり、唯一眺望が予定された地点であることがわかる。このように動線上の視界を常に閉ざすことによって、11畳の間における眺望景観が、より一層開放的なものとして印象づけられることになる。そして同時に、自然空間を代表する遠くの山並の景観と、庭園空間を代表する近くの六景二十勝の景致との対比関係も、さらに強調増幅されることになるわけである。

また、視界を閉ざすための装置は御茶屋に至る動線上にも認めることができる。玄関から廊下を左に折れて御茶屋に至る廊下の途上、東園園池に向かう部分は、視界が園池に開かれるのを遮るかのように板塀で閉塞されている(図-3)。御茶屋に到着した時点ではじめて、人間の視界に庭園景観が展開するよう配慮されているのである。

第四の特徴は、眺望景観が六景二十勝等の庭園景観の一部を構成しているということである。それは東園庭園が回遊式庭園であることと深く関連している。すなわち園池外周の園路をめぐり歩くことによって、次々と展開する六景二十勝の景観を鑑賞できるように設計されているのであるが、11畳の間からの眺望景観は、それらの多くの景致のうち的一端を構成するものなのである。したがって、東園庭園の景観構成は眺望景観だけに依存しているのではなく、多くの要素によって構成され、眺望景観はその一端を担うものでしかない。

以上のような東園庭園における眺望行為の特徴は、拙稿^{6),7)}において筆者が明らかにした、奈良の慈光院庭園(江戸時代初期作庭)や依水園庭園(明治時代作庭)における眺望行為と極めて似かよっている。すなわち慈光院庭園では、書院に至る人間の動線上の視界を完全に閉ざし、書院においてのみ眺望を予定するという手法が採用されていた。また依水園庭園では、眺望行為を園路上のある特定の地点に限定することによって、眺望景観は数多くの庭園景観のうちの一部を構成するものとして位置づけられていた。東園は両者の中間の時期に作庭されており、両者の眺望行為の性格を合わせ持つものといえるであろう。

6. 結 論

以上のように、御座ノ間2階の11畳の間からは、対岸の山脈を広々と眺望できたことが明らかである。この11畳の間は、御座ノ間東端の納戸の上に中2階として御殿の一つ屋根の中に含み込まれるというかなり変則的な構造を持つが、東側が解放的な建具構造を有しており、庭園景観のみならず城郭外の風景を眺望することを意図するが故にあえて変則的な計画のもとに設計施工されたこ

とは疑う余地がない。しかも、人間の動線と視界の開閉という点に着目するならば、一旦視界の閉ざされた空間を通過させ、運動の最終地点である11畳の間においてのみ視界を外に向かって開放するという特徴をもっている。そうすることによって、庭園空間と自然空間との対比関係を東園全体の中のある特定の1地点における特殊な景観として認識させることとなる。両空間の相違を踏まえて、あえて2つの景観を視覚的に連結するための媒体として、水平方向にのびる銃眼土塀の機能が活かされているのである。そして眺望景観は、視界の開閉操作によって、その雄大さや開放的な雰囲気さがさらに強調されることになる。しかしながら、一方では園路づたいに巡覧することのできる多くの固有の庭園景観のうちの、ある一部をなすものでしかないことも事実である。

また、御殿増築以前の「聚遠」の位置については不明だが、『東園記』によれば高い建物であったことが推定される。「聚遠」の建造以前にも、古く元禄期には天神社を中心として、御殿と園池の存在したことも想定できる。したがって、推定の域を出ないのであるが、東園の館、御殿における眺望行為には、未だ眺望行為を予定していなかった東園成立期から、「聚遠」の建造によって初めて眺望が開始された時点を経て、御殿の増築によって眺望行為が庭園景観と自然景観との対比関係を明確に意図した段階に至るまで、発展の過程を想定することも可能である。

なお、本稿を草するにあたり、奈良国立文化財研究所の細見啓三、高瀬要一の両氏、および萩市教育委員会の各氏の御助言、御協力を得た。負うところを記し、厚く謝意を表する次第である。

(1990. 6. 22仮受付, 1990. 11. 30. 受理)

参考文献

- 1) 萩市史(第1巻): 萩市: 1983
- 2) 東園記(周南文集): 毛利家文庫: 山口県文書館蔵
- 3) 毛利十一代史: 毛利家文庫: 山口県文書館蔵
- 4) 日本人名大事典: 平凡社: 1979
- 5) 御城内御作事諸御悩所坪数其外目録: 毛利家文庫: 山口県文書館蔵
- 6) 本中 真: 平城京左京三条二坊宮跡庭園、慈光院庭園、依水園庭園における眺望行為——三者の形態論的相違——: 造園雑誌46-(3), 1983
- 7) 本中 真: 平城京左京三条二坊宮跡庭園、慈光院庭園、依水園庭園における眺望行為——形態論的相違の因果性——: 造園雑誌46-(5), 1983

C.G. 作成に用いたハードウェアとソフトウェアは以下のとおりである。

- 1) PC-9801 RA (NEC)………8 MB RAM 増設
- 2) COLOR HARD COPY CHC-635 (神鋼電機)
- 3) DYNAPERS/3 (ダイナウェア)

Summary

This study is concerned with the reconstructed views from Tou-en Garden which was made under the 6th lord of Hagi clan in the middle age of 18th century, and is still remained in Hagi-jou Castle.

According to "Touen-ki" which was written by Shuunan YA MAGATA (Confucianist), there were six main scenic beauties and twenty scenic spots in the garden. The first rank of those scenic beauties was the east edge of the structure so called "Shuu-en". They were able to view both the scenery of Tou-en Garden and mountains outside Hagi-jou Castle from "Shun-en".

The 11th lord Narimoto MOURI extended the structure to former teaceremony room for his daughter (Takahime) and son (Motonojou). The east edge of this structure was mezzanine, and they were also able to view the sceneries of garden and outside mountains. Therefore, the structure which was suitable for viewing always existed in Tou-en garden.

This study offers the reconstructed views from the mezzanine roomby computer graphics, and also refers to the features of views and viewing as follows.

1. They could have the magnificent and open view which consisted of the scenery of garden and outside mountains from the mezzanine.

2. Garden which located in a close range was the artificial scenery. And mountains which located in a long range were the origiinal nature. The mezzanine simultaneously connect two different sceneries in the sight.

3. The scenery of gaden and outside mountains couldnot come into their own sight, when they were on the leading line to the mezzanine. They could have the magnificent prospect as soon as they got to the mezzanine.

4. The magnificent view from the mezzanine consisted of many scenic beauties and scenic spots in the garden.

— 図 書 紹 介 —

丘陵地の自然環境

— その特性と保全 —

松井健, 武内和彦, 田村俊和編

古今書院, 1990年8月, 2,600円, 202頁

私たち日本人が先祖代々親しみ、生活の糧を獲て、くらし歩んできた丘陵地の自然が、都市化の進展の中、宅地化され消失していった。都市における貴重なみどりとしての存在意義が高まるなか、開発に際し、自然へのインパクトを最小限にしつつ快適な環境を創出していくためには、まず丘陵地の自然特性を把握する必要がある。

しかしながら、これまで丘陵地の持つ複雑な微地形と土壌や植生等との関係に焦点を当てた総合的な研究はなく、その解明が待たれていた。

地形、土壌、緑地、建築、植生地理、生態、地質、造

園、緑地工学等各分野18人の研究を基に、編者らは丘陵地の自然環境の特性を微地形などを指標に類型化してとらえ、その成果を総合して、丘陵地の保全・利用の指針に結び付けるべく取り組んだ。その成果が本著である。

本編では、丘陵地の成り立ちとマクロな特性について考察するとともに、多摩丘陵を例に、ミクロな微地形の自然環境の特性についてわかりやすく解説し、植生、動植物相等自然環境の調査方法を紹介するとともに、興味深いことは『樹木活力度』を用いて住宅地開発による自然環境へのインパクトのとりえ方について紹介しているものである。

地理学、第四紀地質学、土壌学、生態学、緑地学、土木工学、建築学、環境科学などの研究者、学生、地域計画、環境管理計画などの実務家、行政担当者、丘陵地の自然環境に関心を持つ人々には是非お勧めしたい一冊である。
(後藤和夫記)